
わずか10歳で死んだ女の子

高坂桐乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わずか10歳で死んだ女の子

【Zコード】

Z6948C

【作者名】

高坂桐乃

【あらすじ】

この女の子は、わずか10年で命を終えました。10年の間、女の子は、何をしていたのでしょうか。そして、何を求めて続けていたのでしょうか。あの子が生まれてきて、みんなが嬉しかったのに。自ら命を捨てた理由とは…。

第1章 一ノ生の時…わたしひまかつた。トヒウオみたこ…。（前書き）

サスミファンは、見ないほうがいいです。
一応残酷じゃないように作りますが、
残酷には、一切する気はないです！！
苦情は一切受け付けません。

第1章 「一年生の時…わたしはすくつかつた。トヒウオみたいに…」

私の名前はサスミ。

ちよと物忘れははげしいんだけど、
頭は結構いいかんじかな？

・彼女は10歳で命を終えるとは思つてもいなかつた。
自分で、道を選んでいた。未来を考えながら。
彼女は「頭がいい」と自分でいえるのは、自分の道を
自分で選んでいるからだ。

普通のひとは、自分の道を、親とかに選んでもらつてこる。
そう、サスミは、最強に頭がいいのだ。
何故か、親は、頭は、それほどにといってわけじゃない。
サスミが一年生のころ。

サスミが始めてかぜをひいた日。

サスミは、病院についてから、登校する」とになつた。
そのころ、学校では困つていた。

シレン「いなんですかー？ 9×9 わかるひとはー。」

キララ「ヒントはー？」

シレン「9の段のかけ算を書つてみて下さー。」

リク「あー、じゃあ、 9×1 は、9で 9×2 は17。でー 9×3 は
……なんだろ？」

シレン「ちがいますよー。」

キララ「シレン先生」。 9×6 まではいくんですけど、あとがわからなくて。」

サスミ「おはよー」「わこまー。」

リク「あー、サスミさん（あんまり親しくなかつたから、「さん」を
つけて呼んでいた。）
彼女ははるなりこいつ言つた。

サスミ「9×9は81ですよ。シレン先生。」
教室中が固まつた。

みんながわからない問題を一瞬でといたのだから。
シレン「サスミさんがきてくれてよかつたなあ。」

第1章　「人生の壁…わたしはすいじかつた。トヒウオみたこ…。」（後書き）

いの小説はシレンのキャラクター やオリキャラが登場する

第2章 はじめのこじか。皿田巻をもじったサス॥。私は心の形を直す事が

サス॥とにかくコホンのリンにも似ているかも……

第2章 はじめのこじめ。自由帳をもらひたサスミ。私は心の形を直す事が出来た。

第2章 サスミははじめていじめにあった。
いじめ・それはすゞくいやな気持ちをさせる。

ヒリイ「すゞいね。サスミちゃん。」

いつも居眠りヒリイだけど、サスミが何か言つと
きいてくれる優しい子だった。

サスミ「ありがとう。」

3年生に上がった日。

サスミ「で、これが「自分でアップ」のドリルか。」
で、何？！？ 一年の復習つ！？ですか？

かんたんじやんこんなの。

でもつ…。「毎日ドリル」だつて！？
なに？！？

かんたんですなー

サスミには、気になる子はいた。

そう、あの子…ヒ・マ・キ・チ君。

まもなく、三年生の夏はおわりかけていた。

そのころからだ。私の心が、壊れていったのは。

ガラハ「サスミとかいうやつ、自分で頭いいとおもつてゐるらしくいざ。

頭いかれてるんじゃねーの？」

子分「たしかにたしかに！」

サスミは聞いてしまった。あいつら（ガラハ）のこと
等を。

* * *

【自由帳をもらつたサスミ。私は心の形を直す事が出来た。】

秋がきた。風が、通り抜けのよひに。
私の心が壊れていいくかんじで…。

オヤブン「あの…。サスミさんですか？」

サスミ「あ、はい。そうですが。」

オヤブン「あのつ、ノン受け取つて下せ。」

オヤブンが渡したのは、

真つ青な空に真つ白の雪。

そして、何故か赤いチェックの自由帳。

オヤブン「私キルスの父なんですが。」

そして、私がキルスのノートをみたんですつ。

そしたら、消えそうな雪色の文字で、
うすかつたけどはつきりと、

「サスミはバカ」

とかいてあつたんですつ。

そして、この日記帳に絵をかきました。
よかつたら、毎日かいてください。

サスミ「わかりました。お姉さん。私もこのノートに、つらうこと
も嬉しい事も書いてみます。」

第3章 フウライタウンに雪が降った

第4章 フウライタウンに雪が降った
第3章なんだけどな

一ページ目に書いてあった。

‘i will attach and progresses wi-
thout giving up what. since Go-
d of the future surely helps -

サスミには意味はわからなかつた。

一月・このフウライタウンに、

生まれて初めて雪がふつた。

チンタラ「雪、ふつたね。」

サスミ「うん。」

デブータ「綺麗~」

サスミ「そうだよね~。」

マーモ「あのぉ~。ちょっといい?」

サスミ「うん。かまわないよ。」

マーモ「こんど、会おうよ.....。」

サスミ「うんい~よ~おマーモちゃん元気な~い~。」

マーモ「もともと。かな?」

サスミ「そうだったんだ」

オリキャラ紹介

ヒリイ 性別 女 説明 いつも居眠りしているが優しい

第4章 知つてしまつたの…私

家にかえると、

母と父が話している声が聞こえてしました。

母「あのー、寮にいれたらどうかしら?」

父「ああ、ちょっと障害があるよなー。」

母「市の、電話サービスで、障害者の寮をさがしてみましょうか。」

父「障害者はどうかいいてほしによなー」

サスミ「母上、父上、ひどいよ。

私が障害者……？私は障害者……。」

涙…私は生きてていいのかな…。

障害者は、悪気もないのに、変な事をする人…
顔も変で…。

-涙は　涙は　流していいものなのですか？-

私は、家を出ればいいのよね、そうよね！？
怪力で障害者だなんて、こんな所にいたら
いても愛されない…。

どここにいけばいい？保健所？それとも…。

頭はいいと思つ…。考えられる。少なくとも…

私は、自分の部屋の「ハーブティー」の
本の196ページに入ってる、
電話書に、

それと、充電中のケータイ、

それから、リュック、金、食料……

それから懐中電灯……。

あと、地図。

自転車、鍵 - ヘルメット？

こんな物でいいのかな？

とにかく家にはいらないきや。

-私が私でいられる時間 -

”ハーブティ”がない……！？

ハーブティがあつたところに電話書がのこしてあつた。

よかつた。

ケータイは……。

ここにバックにいれてたんだっけ？

リュックはこれでいいな。

金ははいっていた -

入れたつけ?

地図も -

そして食べ物まで -

懐中電灯は何処?

そう思った時 私はつまずいた。

「何コレ?」

「へっぽこな、『かえるかいぢゅうかえるでんとひ』

私つてばバカつ、かえるつてゆーのつけずさー。

よじつ、

ガタン

その時私は -

第5章 めたりじこ町ぐ...やのやむ (漫書セ)

更新遅れすぎ、すみません

第5章 あたらじこ町へ…その前

第6章 あたらじこ町へ…その始

キララ「サスミ、なにしているの……？」

サスミ「……。」

キララ「い・え・ど？」

サスミ「キララには関係ない。じゃあねー。」

「あさ…キララ… 怒るつもつじやなかつたんだ。

私、頭がいい。」

つかれた

キララはぱいだらり。

わちきでつていつたばっかりのキララを連れだししながら、せじまつ
この階段をおりた。

いじの階段ともわれつけなう。

階段と別れたかつた…こままで…

小ここの時の記憶がもどりついた。

母こおとされた…

いまもまつしろな壁に、あたつたときついた
「血」があつた -

もつ思い出さない…すつと…
すつとすつと…。

-死ぬまで -

死ぬもんか。

ガツタン

ふるい玄関のドアが閉まつた。

調子がわるい…どうして?
どうして?どうして??

-私のストレス -

それは、ストレスだよね…

店主「きつぶみせてください」

- サスミは、胸のポケットにしまっておいた
きつぷをわたした -

これも新しい始まりなんだ

どーゆー子がいるかな…。

私は、クリスタルタウンに移動しながら何回もつくづく思った -

電話書だ。
忘れていた

盗賊番
店主
マムル
チンタラ
ねずみこぶん
回復屋

美女と野獸（おい！）

第6章 私は死ぬんだ…死にたいんだ…

私のホームページを
みた。

「…荒らしだ。 -

「サスミは馬鹿みたい。一人で頭良いとか言つたりやつてゐるしど。」

「お前、この世から去つて逝つて欲しい」

「死んだえば良いじやんお前なんか。死ね」

私の個人情報、まるだし。

キルスだ。絶対。

私は、学校に行く…。

机に

「サスミは、馬鹿みたい。ひとりで頭いいとか
いつてるしや。」

とかいてあつた。

引き出しの中の紙に

「死ね」とかいてあつたし…

あたし

死のうかな……。

私は、十歳になつたら、死ぬ。自分から。
そして、あの世にいく。
しあわせだよね……。多分。

ワタシナンカ、イテモメイワクヨネ……。

もう、明日が誕生日。
10せいの。そして、

おわりのじかんがくるのい：

魂がのこるんだつた。そう、すべてはおわりじやない。

この世にはみえたまくてもわ

うなんじよ？カミサマ。

もう死ぬのも時間の問題で：

母、父から逃げられるのも時間の問題。

私は死ぬつて決意した

あした、あの場所で

から

もう明日はきていた。十年いきてそれで
-おしまい-

魂を残して私は死ぬ

小さい時川でおぼれさせられた、あの場所。

あの崖で死ぬんだから。

そう、ここで。
キララが知らぬあいだに…!
キットね…。

死ななきゃならない。

サスミは落ちた……。

私が助けられた？シニタイノ。
お願い、だからそのてを離して。

-死んだはずなのに -

私はサスミのてから離れて、
川へ落ちた。

新第1章 天国つて言つのは…。（前書き）

この小説の更新スピードがガクンと下がります。
かなりの中編小説で大体半分以上物語が進んでいるのであとは半分
以下でしう

新第1章 天国つて言つのは…。

ここは何処？天国？

そうみたい。私は天使みたい。

あれ？リクとキララがいるよ。なんで？

私は天使ではなかつた。人間だつた。

夢かな？つねつてみた。

痛い。

ここは何処だか私は誰だかわからなかつた。

見えるのは、花畠。

キララが花をつんで、
私にくれた。

なに この花

私を不思議な気持ちにさせてくれる…。

見えないよ…あたしの眼。

目の前まつかになつて、私の体もなくなつていた。

あなたは誰？だれなの？

私を暗い気持ちにさせる…。誰？誰？

私は死なないって信じ続けてたじやない…。

・違つ。

死のうと思つたんだよね…？

それで…

私、死んじやうかもしれないのに…。

私、家出したのよね。

母と父が

捜索願い出したの……！？

こんなところで

あんなくらしに戻るのは

嫌。

私は何をすればいいんだろう…。

戦う。私は戦う。

雨が降つてきた。

でもあたしは戦う以外に選択しがあることを
知らなかつた。

戦つたら、あたし、死ぬんじゃない。

どうせ 死ぬ世界、ここは地球。

この世もあの世も誰かの魂があることは同じで
そしてこの世界は魂がある。未来もある。
どうせ死ぬんだつたら、もう少しでも生きていよう
戦いだなんて恐い事はしないで、

私は元のぐらしにもどつたら

私はつらい

つらいけどその「恐ろしさ」に負けてはいけない。

「サスミ」私の名前、ずっと前、十年前

私の家族がつけてくれた名前…。

私には母親と父親と…あと一人

だれだけ。いつも面倒見てくれたのに
忘れてごめんその謝りで、すんだ

あの子に恩返しをしたい…けど

あのこは死んだんだ。

私が死ねばみんな 悲しむ

現実はそんな生き返りつつ生き返れる
世界じやない。

私は、死んだに決まつてゐる。

私はあの世に旅立つて逝つた。

振り返った。わたしだつていいことあったのここ。
私だつて…。

でもなんで? なんでリクがいるの?

あの子、家族、姉

それはリクだつたんだよね…
リクまで死んだの? なんで?

あの学校が見える。校庭が見える。

魂が見える。みんなの。

・そんなんトコこむと濡れちゃうよ…

なこここの言葉…。私、なに思つてるんだうつ
雨もふつてないのに…。

ここは校庭じゃない。

御葬式する場所。だれか死んじやつたのかな?

名前は…あたし…

なんで? 私はここにいるよ。
そつか。私死んだんだよね。

体を、神からもらおうか。

なんの体？人間？

サスミと同じ子をください

-サスミと同じ子をください -

私は私だから、私をやりなおしてみたい。
虐められた事も障害なのも全てやりなおして。

でも、あたらしい体の私をみたらどう思う？

同じ姿の私がいたら：

あの死体はなんだと思う？

私は私だけど、

姿はかえておこう。でもつ

そんな姿じゃ私だって信じてもらえないから

サスミの姿でいてください。

私のまわりにホイミみたいな光りがきた。

人間の体ってこんなにあたたかいのね…。
リクにもこれしてるかな？

秋色の服きてる
リクだ…。私の家族…。
リクは本をあふれるほどもつて急いでいる。
つて 私が落ちるー！？

ど
し
い
ん
て
！

リク「つたー。」
何？今なんていつたの？
眼を閉じてたから聞こえないってことはない。
リク「あつ、本があ…。」

リクは振り返つて

リク「なんか知り合いに似てるね。」

サスミ「私よ私。小さいころからあなたのそばにいたじゃないの。」

リク「…。誰だっけ。」

サスミ「サスミよ。サスミ。私は…」

私は話をとめた。

そんな死んだ人が生き返る話なんて聞いたら

恐ろしいよね。

サスミ…。あのこは死んだのよ。

生き返つていたらしいのに…。

リクがかりていたのは

「人はなぜ、弱い生き物なのか」

「 - A life does not return - 命は戻つてこない。」

サスミ「リク…。私を信じて…。」

（テミの気持ちにナレーションをかえました。）

リク「何故私の名前を知ってるの？あなたはもしかすると…。」

「サスミかもしだれない…。」

だってあなたは、天使のように笑つて遊んでいたらリンは「ばか～あ

とか言って私を困らせてた。

母には「サスミの姉ということを言つないわれた…。

ここにいるのは、サスミかもしだれない。きっと妹のサスミだ。

あたしはあたしの時間を生きる

やせた黒板にサスミが

笑顔で

あたし見つめながら

嬉しそうに

事業始める

あたしは生きていたのに
あのこはいない

この黒板だけが残されて
あたしの眼の中では
あたしの、涙が
あふれでながら
あたしは今日も

あのこを探し続けた

リク「サスミかもしれない…。」

サスミ「私は…私はサスミよ……………！」

あのこの命はもうないの?
それとも生き返ったの?
そんな話は あるわけない
サスミはもういないのに
あたしは取り残されたの?
それとも

神様は私の幸せに力をかしてくれるの?
自ら命を失つたんでしょう?

なんで自ら生き返りたいって思ったの?
それは謎につつまれたままだった

キララ「サスミだよね? なんで? 魂?」

リク「わからな...」

サスミ「私が説明します。」

最終章 世界は散つて

そういうたらスクリーンがやぶけたみたいに
私の頭からその場所は散つた。

ここは何処だろう。

あの世はなかつたの？

これは夢？

- - - - I am sorry to have lost
the life myself . - - -

（意味：生活を私自身失つて、私はすまなく思います。）

I want to redo once again . - L
ife

Thank you for becoming me . I a
m having been one person .

（意味：私は、やり直したかったの。

あなたが私を動かしてくれたのよ。そうよ。

私は1人だつたの）

I am having become an actress
and having swarmed . It is that
the mother was killed and I w
as able to find the useful way
which it was hard on me and d
ied but . You found it . I am
God . It is heavenly God .

（サスミから…。最後に。：

私は、女優になりたかつた。

母親が死に、

私が、自殺。

私は本当は神だったの。私は天国の神です。
私は、貴方を見守ります。

そして

私は、ざぶとんだけの所に
埋まつてました。

「サスミつて誰？」

どうやら

夢をみていたようです。

凄く長い。

お姉ちゃんの部屋に行くと

お姉ちゃんは学校にいく準備をしていました。

「亜梨沙、金曜から2週間も寝ていたのよ。」

わたしはびっくりしました。それは
この夢は、宿題の課題にしようと思つています。
リンちゃんは…英語が得意なのかな?
わからない。それは今も。私にも。

「さてと、今日は学校やすんで、この
小説かくか!」

「『家でをして』…」

「『I』は何処?天国?』でしょー?」

「でーきた!」

その後は気になるなあ……。

私が描こう。

緑色のノートに
タイトルをかいた。

次の日

「種村 アリサさん」

「はあ——い

「すごいいい小説でした。秋の小説大会に
だしました。そして、『あなたは作家になりませんか?』
つて。」

サスミ、貴方のおかげで私の夢はかないませんでした。
また私の前に現れてね。19才のサスミ……。

エピローグ

サスミはキララの暖かい手を離した。そしたら私は、魂ものこらなかつた。

天国はただの幻想で

もう失った命はもう戻らないの

私は、9歳になつた、16歳で話を失つて、時間はすすみつづけるけど、私は

後悔している。死んだ事。

私はもうちょっと生きててよかつた…。

ジカンハモトニモドラナイノ?

聞いても聞こえるのは草の音だけ。

それから10年たつた。

私の前に本当の母が現れた。

でも時間はもどらないの。
いい時間に生まれなかつた。

It is tired of walking. Rain i
t starts to rain. It could not

THE END
応援ありがとうございました！

私の時計はとまつたまま

44

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6948c/>

わずか10歳で死んだ女の子

2010年10月12日03時06分発行